大原君（前編）

みずき　啓

二〇一五年十月二十三日　晴れ。横浜の関東学院同期会に出席。

十時過ぎに家を出る。

相鉄線海老名駅で、モニターを見て驚いた。今までは急行オンリーだったのに、各駅・急行・特急とある。先発の急行より後発の特急が、横浜に早く着くらしい。

結局、会場の崎陽軒には三〇分以上前に着いてしまった。エントランスのボードで場所を確かめていると、名はちょっと出て来ないが、知ってはいる顔が横に一人。気後れしながら挨拶を交わす。同じエレベーターに乗ったのは四人だった。

「何階だったっけ。五階だったよネ。まア、開けば受付がすぐ見えるから」知らない人が言う。

ドアが開くと、まさしく受付に荒木女史がみえた。もう一人の女性は上へ乗っていった。

会費一万円を払い、接着剤付きの紙の名札を服にペタンと貼り、パンフレットを受け取り、写真返信封筒に自分の住所氏名を書き入れ、妖しい白衣観音という感じの尾崎さんに指示され、男性女性に分れた箱からテーブル番号の籤をひく。

やれやれと振り向くと、ホールの立ち話の輪はまだ心細い数。女性はソファの二人だけ。とりあえずそちらへ。笑い声と体つきがコロコロしてブーちゃんと呼ばれていた、学生時代そのままの小泉さん。痩せて、ナイフの様な危険な雰囲気だった桑原さんは、今や、限りなくブーちゃんに近づいている。彼女とは二年前、伊豆の天城山荘での一泊同期会で一緒だった。

「またアメリカから出て来たの。脚、どうお」

「あれから手術したよ。観念して」

天城山荘で彼女は車椅子用のスロープを使っていたのに、城ヶ崎海岸を歩く根性があった。

天城山荘はキリスト教研修施設。中高時代、毎年三泊で祈りと遊びとダベリの日を過ごしたところである。

十五年位昔、俳句のパーティがこの最上階であった。

ずっと孤独にしている人が気になり、親しくもないのに声をかけたら、その後が、大変だった。
七年前、姪がここで結婚式を挙げた。ケーキカットをすると、焼売がわんさか転げ出た！　ソーラン踊りなども出て、盛り上がったいい式だった。
あの日、私の鼈甲の櫛がロビーに落ちて割れた。ハッとして、神様が見ぬ内にサッと拾って隠した。兼六園の成巽閣で買ってもらった、思い入れのある櫛でもあった。象嵌の金細工が糸になって延びた。
その後、姪は子供達を抱いて離婚。下の子はまだ誕生日がきていなかった。

手渡されたパンフレットの表紙の裏は、物故者名簿だった。三五名。親友だった一恵さん、ナンヤ。弘法山ハイクで初めて話した菅沼君。あれは五年前のこと（今、白血病の寛解なんだけど、新薬がすっごく効いてるんだ）と言って、精力的に山を登っていたが、去年、訃報がとどく。
次ページは今日のスケジュール。出席者名簿。欠席通知のコメント欄のコピー集と続く。ご主人代筆の（五九で脳梗塞になりました。車椅子生活です）という親友の平川さんの葉書もあった。後遺症の左右異なる眼振がなければなぁ、普通の生活に限りなく戻れたのに。揺れる眼では歩行もテレビも読書も難しい。決して彼女からは電話してこない。こちらからかけた電話には、自動小銃のように、一方的にしゃべる。
長い旅行も一緒にし、人生に誠実を尽してきた平川さんを知っている。彼女の今の矜持も知っている。

籤のCテーブルには宮崎さんが座っていた。ポパイのオリーブ体型を駆使した、毎年の競歩大会。あのぶっちぎりの先頭を行く彼女の雄姿。菅原君と結婚していて、同期会は、夫婦で精勤賞。
「ご主人とテーブル違いだったの？」
「ここんとこ調子が悪くて、今日はお留守番なのよ」
「えっ、どしたんだろ」
「ねぇ、今年どっか海外行った？」
なんでそんなこといきなり聞くのか。すると、
「クロアチア二月に行ったの。いいとこよう」
「湖が幾つもあるんだってねぇ。貴方達、大山に上った時もカリブ海クルーズの話してたよね。良く夫婦でいくはねえ、羨ましい」
宮崎さんの隣りは椅子が抜けていて、その先に東大へいった鈴木君がぽつんとしている。彼は、ヨガをや

っていて、同期会メールに、堀切さんを教祖みたいに祭上げる、妙ちきりんな、意味不明的メールを入れる。堀切さんは、彼が通うヨガ教室の先生だ。

高校時代、私に、

「私がクロちゃんと居るのはねぇ、貴方と歩くと私がスマートに見えるからよ」と言う堀切さんは、(元)付きかもしれないが、やはり、親友だろう。後ろから刺す人でもあったが、此れっと思った人には情が深すぎて、停止位置を掴めぬところもあった。

友情のアプローチは常に八か九対一で向うから。卒業後、結婚後も濃い付き合いが続いたのは、ぶちまける相手が私以外に見付からなかったのだろう。実に、平凡な悩みだったが、多き人だった。私も相当ぶちまけたが、お互いひるまなかった。結婚後の彼女の状況は、私よりかなりきついものがあった。

三〇代の終わりに、彼女は下瞼の皺とりを有名美容整形でし、手術は失敗した、と思った。後悔と怒りが日々を焼いていた。毎日、電話でほとんど同じ内容を言ってくる。負のエネルギーに満ちた声が一時間、聞いていれば何時間でも私の生を浸食する。北里大学病院の、確か美容整形外科に相談に行きたいといい、私は子供を負ぶって同行した。天国のような、立派な病院だった。(手術は上手でも下手でもなく、普通。時間が解決するよ)。との、医師のご託宣。納得できぬ彼女の心は行き場を失いかける。そして、黒雲で膨張した心を抱えて我家に来る。下瞼を突き出し

「もっと見て、もっと真剣に見なさい、ほらちりちりしてるでしょ、ここ。見なさい。前はクロちゃんより皺がなかったんだから。きれいなもんだったんだから。見て!」ほとんど叫び声。覗き込んでも、少し赤みが勝った皺があるような、無いような。問題は、手術に走らせた鬱積にあると思う。

時に彼女は自分の古着を持ってくる。当時、私は(生活保護の方がましかな?)みたいな生活をしていた。

新婚一ヵ月、夫に

「こんなに貯金ができた」と言った。

「結婚前は三千円ですんだ」と冷ややか。二食つき会社の寮費のことを言っているのである。現に、社宅に入れば家賃は三千円ですむ。家が建つまでの一年間、私は、実家に勤めたいので借りた海老名のアパートの家賃は一万八千円。私の給料は入れているので夫に損はかけてないが、最初から居場所のない結婚だった。秦野のかなりの中古の家なら買えた、持参金と私の貯金は

「実印を持って来ちゃったんで、僕の名前でしか預けられけど、いい？」その電話の後、私の前からお金は消えた。実家に帰りたいと言うと手が飛んできた。不運は重なり、結婚して最初の生理はなかった。マタニティが要る、と言うと

「一時的だからなぁ。何とかならないの」

結局、マタニティは、横浜の母が用意してくれた。

池袋の元教師の義母は、ごみ置場やあちこちから拾って来た物で、煮炊きその他を賄うエコな生活をしていた。後に大金を遺した人でもあった。ＤＮＡとは、怖いものでもある。

母よ、貴女が強力に薦めた人はこんな男ですよ。私は、母に意地を張って、幸福へ努力しないバカだった。

堀切さんの、黙りがちだったり泣いたり怒って叫んだりする電話は、半年を超えると私の心に鬆（す）をたてだした。私は彼女を抛り出した。

高校の春休み、彼女は蓄膿症の手術をした。病室の入口に彼女と並んで、この鈴木君の名札があるのに気付く。彼は布団を頭から被り、壁へ丸まっていた。手術後の、顔を赤黒い不気味な風船みたいに、腫れ上がらせた堀切さんに、鈴木君ってどうのこうのだよ、などとふざけてまくし立て、身悶えさせた。帰り際、

「鈴木君ごめんね。全〜部冗談だからね」。謝ったが、あの時から彼は私を嫌いになったはずだ。

桜木町、カモメのよぎる窓の下を運河が流れる病院。

数年後、電話ラッシュがまた始まった。別の問題が起きていた。その時すでに、彼女のヨガは、毎年フランスやインドに修行にも行って、ベテランの域だった。彼女のせわしない呼吸音、余裕のない、変に高い声を聴きながら、ヨガは精神修養にもなるんじゃなかったっけ？　以来、ヨガの効用には疑問を持っている。

二か月後、彼女を背負い投げ。

私達の物語は終わった。

私の左隣りは知らない男二人、それから犬飼君。彼はずうっとクラスで二番目に小さく、コマコマと動きの速い少年だったが、卒業後会った時は大男になっていて吃驚した。穏やかな、人生に大満足ですという、いい顔になったものだ。彼の右の男二人はこれまた分からない。

会は、一分間の黙とうから始まった。
ＭＣは長谷川藤子さん。マネキン型美人。中一の時から上級生に騒がれていた。いまだに中高年のマドンナしている。関東学院の元体育教師、同窓会副会長。いまだ独身。三人の見目良き同期生と同棲と別離を繰り返し、陰で公衆便所と呼ぶ人もいるのは、美人の損なところ。誠実に強く生きて、ご立派と賛辞を捧げる。誰かさんみたいに安全地帯からちょろっと降りて、シラリと戻るを、繰り返したりしないもの。
しかし、元教師らしく人を駒みたいに、勝手に動かしたがる性癖がある。そこのところがＭＣにうってつけなのかもしれない。
まず、広瀬君をスピーチにご指名。私はずっと知らなかったのだが、かなり有名な歌手。元から派手な美貌だったが、さすが、際立つ男振り。美しくはないが、有能な一流歌手である繊細な妻を、支えるために、自身は裏方へ廻りがち、と新聞で読んだ。美形の鑑賞に気を取られて、何を話してるかは、上の空。
昔、伊勢佐木町裏のジャズ喫茶リンデンで、彼に出くわしたことが一度ある。リンデンは内装も何もかも真っ黒い小さな店。
暖かさと冷淡さのバランスが絶妙な、若いボーイッシュなママ。マスターは近くの金物店員。
クリスマスが近づく日、待ち合わせ時刻には早すぎて、ぽつんとママしか居なかった。コーヒーと（ニーナ・シモン）を回してと頼んだ。私はねばっこいココアみたいな、ニーナの歌いっぷりが好きなのだが、ここでは歌は邪道なのだ。客はお風呂に浸かって、自分の臍を右から左から眺めてるとしか思えない感じに体を揺らし、演奏の流れに浸かるのが、正しい聞き方なのだ。
十代の頃から、私は十二月は鬱になる。その日も、焦燥と倦怠が身の内で睨み合っていた。
コーヒーを受け取り向き直ると、上の棚に赤いリボンのかかった大きな箱が、のさばっているのが見えた。誰か、プレゼントを貰った幸せな人がおいてったんだ。それなのに、私は憂鬱あじのコーヒーを抱えている。ニーナも今日は話しかけてくれない、体温がたりない。
黒いオーバーの彼が入ってきた。私の前でセーターになると、奥へいった。戻ってきた彼の両腕には、あの箱があった。あの時、私は世界で一番幸せな女だった。あの瞬間に死んでしまえたら。二十三で。